

# 仮名の原則と語表記

## —古本節用集を観察対象として—

今野 真二

---

### Abstract:

#### Principle uses of Kana Notations: from the Analysis of the Index of the Old version of *Setsuyoushu*

This paper analyzes a dictionary titled *Setsuyoushu* written in the Muromachi era. The index of *Setsuyoushu* is listed in the the “い(I), ろ(ro), は(ha)” alphabetical order. For example, all the entry words that begin with the first syllable which is pronounced “I” are collected in the “I” section. The “I, ro, ha” alphabet consists of 47 letters that include three pairs of letters that have similar sounds “い(I)” and “ゐ(I)”, “え(E)” and “ゑ(E)”, “お(O)” and “を(O)”. There were no pronunciation distinctions of each pair in the Muromachi era. Therefore, the letters “ゐ”, “ゑ” and “を” are not used in the index of *Setsuyoushu*. This means there are 44 sections in *Setsuyoushu*. This probably is a consideration for users not to be at a loss as to which section in the index they should look at when they look up the word that begins with the sound “I,” “E,” “O” since they cannot distinguish each letter by pronouncing it by themselves.

There were four different kana notations for the contracted sounds such as “ショー (Sho)” “セウ (Seu)” “セフ (Sehu)” “シヨウ (Siyou)” and “シヤウ (Siyau)”. If the beginning of words are written as “セウ(Seu)”, or “セフ(Sehu)”, these words are to be collected in the “セ(Se)” section. However, if the beginning of the same pronunciation words are written as “シヨウ(Siyou)” or “シヤウ(Siyau)”, these words are collected in the “シ(Shi)” section. The solution to avoid this confusion could be to collect these words in both the “セ(Se)” and “シ(Shi)” sections. In fact, some of the 70 existing *Setsuyoushu* texts adopted this solution. Since the Muromachi era, various methods have been adopted to fill the gap between the sound and the way the words were written. This paper points out that the start of this kind of solution is seen in *Setsuyoushu*.

---

## 要 旨：

室町時代に編まれたと考えられている辞書体資料である古本節用集は、見出しとしている語（句）を仮名で書いた場合の 1 字目の仮名によって、「いろは分類」している。しかし、その「いろは分類」は 44 であることが多く、「い」「を」「え」を部として設定し、「ゐ」「お」「ゑ」は設定していない。これは、古本節用集が編まれた室町時代には「い／ゐ」「お／を」「え／ゑ」の発音の区別が失われていたためと考えるのがもっとも自然である。つまり、古本節用集に収められている見出しを「検索」するにあたって、「検索」者が探している見出しがいずれの部に所属しているか、迷わないようにするための「手当」であったと思われる。かつて古典かなづかいで「ゐる（居）」と書いていた語も「いる（入）」と書いていた語も、等しく「い部」に所属するという点において、古本節用集の「いろは」44 分類は「非かなづかい的」であったといえる。

拗音から始まる語、例えば「ショウソク（消息）」は（かつてどのように書かれたかということと離れれば）「セウソク」「ショウソク」「シヤウソク」「セフソク」という 4 通りの書き方がひとまずは考えられる。例えば古本『節用集』の 1 テキストである「黒本本」においては、「せ部」に「セウソク」、「し部」に「ショウソク」と振仮名を施した見出しが置かれている。このように同一と思われる語が二つの部に見出しとして置かれていることを「双掲（そうけい）」と呼ぶが、この「双掲」も発音と書き方との乖離を補う「手当て」とみることができる。こうした状況は「多表記性表記システム」にちかいと考えることができる。

## キーワード：

かなづかい 表音的表記 多表記性表記システム

the use of kana Phonographic Transcription Multi-Expressive Notation System

## はじめに

亀井孝は「「ガ行のかな」」（『国語と国文学』第 33 巻第 9 号、1956 年、後 1984 年、吉川弘文館『亀井孝論文集 3』再収、引用は後者による）において、次のように述べている。煩を厭わずに引用しておく。

《一個の「かな」は、一個の音節を排他的に代表する。》

すなはち、これは、日本語における音節とかなとの相互の対応関係の原

則であるとみることができる。そこで、この原則を、かりに以下「かなの原則」と略称する。

この「かなの原則」は、日本語の音節と「かな」との対応関係が、現実において、一個対一個の形式で貫かれてゐる、といふことを意味するものではない。すなはち、この「原則」は、それに対する「但しがき」として、つぎのばあひを排除するものではない。

第一に、一個の音節が、二個のかなの一定の組合せでしか代表されえないばあひ。拗音と呼びならはされてゐる音節が、それである。

第二に、一個の音節が、二個以上の別個のかなのいずれかの一個によって、排他的に代表されるばあひ。じちおよびずづの使い分けは、その一例である。また、語頭以外といふ条件におけるところの、「わ」と「は」の使い分けのごとき。

第三に、連続する音節群が一個のかなでしか代表されえないばあひが考へうる。ただし、これについては、実例はない。（ここでは、万葉がなにおける二合仮字のごときものは、考慮に入れない。）

第四に、別個の二種の音節が、一個のかなで代表されるばあひ。清濁の区別をしないばあひのかなの用法は、その例である。

いま、ここには、同一の音節を、いろいろと違った字形で書かうとする美的ないし学術的な要求は、除外して考へてゆくこととする。これは、音節とかなとの対応関係の問題に属せず、表現におけるかなの選択の問題に属する。或る一定のかなが、つねに或る特定の一個の音節を代表するやうにあらかじめ定められてゐるかぎり、この選択の問題は、「かなの原則」を犯すものとはならない。

それに反し、上の「第一のばあひ」「第二のばあひ」「第四のばあひ」に属するそれぞれの実例は、「かなの原則」に対する「但しがき」の効力を発生せしめる。しかし、それら実例は、「原則」そのものを否定する力はない。「原則」の方を先に認めなければ「但しがき」は生れてこないのが道理である。ここでは、それら実例が、どこまで「原則」に牴触するものとなつてゐるかを問うてみることにしよう。

もし、「一個の「かな」は、一個の音節を排他的に代表する。」といふことが、「かなの原則」であるとすれば、あきらかに、これに牴触する実例の

存在することは、すでに指摘したとおりなのだが、しかし、いまや、日本語の音節と「かな」との対応関係を、せまく、一個対一個の形式で貫かれてはみなくとも、一対一の形式は守られてゐるのではないかと考へてみると、このやうな形式的な意味での「かな」と音節との間の一対一の対応は、じつは、いまだ「第一のばあひ」には、損はれてゐない。すなはち、なるほど拗音節は二字で書かれはするが、二字が一つの単位となつて一個の拗音節と互に対応しあふ点では、対応の形式は依然一対一なのである。

（「規約」は「きやく」、「客」は「きやく」といふことにして。）ところが「第二のばあひ」になると、たとへば「けいずかい」（ただし、「現代かなづかひ」に関していふ）と「かなづかい」とに現れる「ず」と「づ」は、二つの別の語を構成する単位として排他的に用ゐられるのであつて、そのかぎりでは「系図買」の「ズ」と「ず」および「仮字遣」の「ズ」と「づ」（引用者補：ここでの「ズ」「ず」「ズ」「づ」は斜線のかぎ／＼に入れられている）とのそれぞれの対応そのものは、やはり、一対一であるが、この一対一の対応は、「かな」と異なる「音的単位」との相互の間に認めうる価値関係でなく、「かな」と意味をもった単位との相互の間に認めうる価値関係である。ここに対応の性質の根本的な相違が存する。かくして、原理と原理との間の相克がこの相違から生じてくる。歴史的にいへば、相克は、つまり、かなづかひの形をとつて現れた。

したがつて、かなづかひの問題が、「かなの原則」をそれだけでは「語」を書き表はすに不十分なものたらしめるに至つたことは、いふまでもない。いな、元来、「かなの原則」は、直接には「語」とは、かかはりのないものである。「かなの原則」とは、「かな」がいはいゆる音節文字であることの根拠である。（四～六頁）

本稿では、右の言説を稿者なりに整理、検証することを第 1 の目的とする。稿者はこれまで、「かな」ではなく「仮名」という書き方を採つてきているので、本稿においてもそれに従い、標題も「仮名の原則（と語表記）」としたが、その意味するところは亀井孝の「かなの原則」と等しい。そしてその整理の結果に基づいて、古本節用集が 44 部構成を採つてゐること及び古本節用集の振仮名について考えることを第 2 の目的とする。

## 1 「第二のばあひ」再考

先に掲げた言説においては「日本語の音節と「かな」との対応関係を、せまく、一個対一個の形式で貫かれてはみなくとも、一対一の形式は守られてゐるのではないかと考へてみると、このやうな形式的な意味での「かな」と音節との間の一対一の対応は、じつは、いまだ「第一のばあひ」には、損はれてゐない」と述べられている。

しかし、「第二のばあひ」については、「この一対一の対応は、「かな」と異なる「音的単位」との相互の間に認めうる価値関係でなく、「かな」と意味をもった単位との相互の間に認めうる価値関係である。ここに対応の性質の根本的な相違が存する。かくして、原理と原理との間の相克がこの相違から生じてくる。歴史的にいへば、相克は、つまり、かなづかひの形をとって現れた」と述べられている。

やはり「現代仮名遣い」に基づいた例によって整理する。「現代仮名遣い」においては、「ズ」と発音する音節には仮名「ず／ズ」を使うことを原則としている。しかしながら、「本文」の「凡例」の第2には「特定の語については、表記の慣習を尊重して、次のように書く」とあり、その5には「次のような語は、「ぢ」「づ」を用いて書く」とあり、例えば「つづく（続）」が例示されている。現代日本語において「ツヅク（続）」の第2音節の発音は「キズク（築）」の第2音節の発音と同じ「ズ」である。「語を現代語の音韻に従つて書き表はすことを原則」としていることを「前書き」の冒頭で謳う「現代仮名遣い」がその「原則」を貫くならば、同じ発音をしている「ツヅク」「キズク」の第二音節は同じ「ず／ズ」によって書くことになる。しかし、「現代仮名遣い」は「表記の慣習を尊重して」「ツヅク（続）」は例外として「つづく／ツヅク」と書くことにした。「表記の慣習」は「当該語のこれまでの書き方」と言い換えることができる。

「ツヅク（続）」に関していえば、例えば『万葉集』巻5の「年月波 奈何流々其等斯等利都々伎 意比久留母能波（としつきはながるごとしとりつつきおひくるものは）」（804番歌）の「都々伎」は「ツツキ」とであると考えられており、第2音節は濁音「ヅ」ではない。そして、いわばそれゆえ「現代仮名遣い」も「つつき／つつく」という書き方を保持しようとしているともいえよう。また濁点の使用ということがらもかわるが、それ

については措くことにすれば、「ツヅク（続）」の「これまでの書き方」は8世紀まで遡ることになる。8世紀を起点とすれば、この語は8世紀から現代までずっと「つつく（つづく）」と書かれてきたことになる。表現が粗くなることを承知でいえば、（この二つの音韻を組みにするという述べかたにすでに音韻変化の結果が反照してしまっていることになるが）「ズ」「ヅ」という二つの音韻をあらわすのに、仮名「す／ス」「つ／ツ」をそれぞれ対応させていた。「ヅ」がなくなり音韻は一つになったが、かつて「ヅ」に対応していた仮名「つ／ツ」は消滅していない。一つになって残った音韻が「ズ」で、それにはかつて仮名「す／ス」が対応していたことがはっきりと認識されていれば、「ズ」と発音しているのだから、仮名「す／ス」で書くということ徹底させることもできるかもしれない。しかし、残った音韻がどちらであるかは、すぐにはわからないであろう。その時に「当該語のこれまでの書き方」に（可能なかぎり）従うという「書き方」が採られる、あるいはそうした「書き方」を採ろうとするということが考えられる。

仮名は音節文字と呼ばれることがある。音節文字は表音文字である。しかし、そうであっても、仮名を音節と対応させて、「仮名の原則」に従って書くという「書き方」と「これまでの書き方」に従って書くという「書き方」とがいわば二つの「原理」としてあり、亀井孝が述べているように、その二つの「原理」の「相克」が「かなづかい」ということがらであることになる。このことは周知のことがらともいえようが、「かなづかい」が「仮名の原則」寄りの観点によってとらえられることはあった。

例えば、湯沢幸吉郎『室町時代語の研究』（1929年、風間書房）第5章「抄物の仮名遣と発音」においては、「オ」「ヲ」の仮名は区別せられず、しかして各書各場合を通じて、「ヲ」を用いることが多い。「ホ」も語の中か末にあるものは、「ヲ」か「オ」で記される場合が多い（31頁）と述べられている。こうした「みかた」はいかなる語がどのように書かれているか、ということを経験にしない点において「仮名の原則」寄りの「みかた」といってよいであろう。「区別せられず」は挙例から判断すれば、「古典かなづかい」において「ヲ～」と書く語を「オ～」と書いた例があり、「オ～」と書く語を「ヲ～」と書いた例があるということと推測するが、「古典かなづかい」において「オ～」と書くあらゆる語に「ヲ～」という書き方が存

在し、「ヲ～」と書くあらゆる語に「オ～」という書き方が存在している時に始めて「区別せられず」といえるのではないか。拙稿「連歌書のかなづかい」(『国語学』第139集、1984年、後2001年、清文堂出版『仮名表記論攷』にかたちを変えて所収)においては、語を単位として「かなづかい」の整理を試みた。この整理のしかたは従来「かなの原則」寄りにとらえられていた「かなづかい」を「語」を単位としてとらえた点において、とらえかたが異なる。このことについては、拙書『かなづかい研究の軌跡』(2017年、笠間書院)においてふれる予定であったが、適当な箇所がなかったために、ふれることができなかったのも、ここで述べておくことにする。

## 2 古本節用集の「いろは分類」

江戸期に編まれたと思われる『節用集』を近世節用集と呼び、それ以前に編まれたと思われる『節用集』を古本節用集と呼ぶことがあるが、本稿でもそれに従う。古本節用集の多くは、いろは47文字のうち「ゐ・ゑ・お」を「部」として設けず、「い・え・を」部に併せる44部構成を採る。ただし、『節用集』諸本のうち、空念寺本と増刊節用集とは「ゑ」部をたてる45部、易林本は47部構成を採るので、これら3テキストは本稿の観察対象から除くことにする。古本節用集が編まれた時期をひとまず室町時代中頃と考えておくことにする。

橋本進吉が「古本節用集の研究」(『東京帝国大学文科大学紀要』第2、1916年)において「節用集は伊呂波によつて部を立てたものである」(128頁)と述べて以来、古本節用集は、「語の第一音節によって、イロハ四四部(「ヰ」「オ」「エ」は、各々「イ」「ヲ」「エ」に合わせる)に分ち、さらに、天地(「乾坤」とするものもある)・時節・人倫・官名・畜類・草木・財宝・食物・支体・衣服・数量・(病名)・言語(「言辞」「言語進退」と称するものもある)のように、十二部門(あるいは十三部門)に意義分類する」(1995年、世界思想社、西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』327頁)などと説明されることが多い(註1)。

右では「語の第一音節によって」と表現されているが、そのことについてまず整理しておきたい。ヤ行のエとア行のエとは、10世紀半ば以降に、ア行のオとワ行のヲとは11世紀初め頃に、ア行のイとワ行のヰと、及びア

行のエとワ行のエとは12世紀末頃に、区別を失ったというみかたが一般的であり、それに従えば、12世紀末頃までに、「イ・ヰ」「オ・ヲ」「エ・エ」は区別を失っていたことになる。つまりかつては発音上区別があったア行のイから始まる「イル（入）」、ヤ行のイから始まる「イル（射）」、ワ行のヰから始まる「キル（居）」の第1音節の発音の区別がなくなったということである。先に述べたように、古本節用集が編まれた時期を室町時代中頃と考えれば、当該時期にもそのようであったことになる。

室町時代中頃には「イル（入）」「イル（射）」「キル（居）」の第1音節が（音声的にどうであったかは措いて）「イ」という一つの発音であったはずで、自身の発音を拠り所として古本節用集を「使う」場合、この「一つの発音イ」が一つの部に収まっていることは自然である。

ただし「一つの発音イ」がかつてどの仮名と対応していたか、ということとは問題ではないと思われる。つまり、現在自身が[i]と発音していて、その発音にかつて対応していたのは「い／イ」の仮名であるということが認識されているために「ゐ部」ではなく「い部」がたてられているということではないと考える。それは古本節用集にやや先立って成立していると推測される『運歩色葉集』は「い・ゑ・を」部をたてる44部構成を採っており、「え部」ではなく「ゑ部」をたてているからで、原理的には「余った仮名」のどちらか一方がたてられていればよいと考える。

実際にどのようなになっているかといえば、例えば経亮本においては、「鑄（右イル）」（言語門）（ヤ行のイ）、「居（右イル）処也」（天地門）（ワ行のイ）（「右」は右振仮名であることを示す）が「い部」に収められている。「いろは」47文字の中には「い」「ゐ」があるので、収める「一つの部」は「い」「ゐ」どちらでもよいことになるが、「を」を「お」に、「ゑ」を「え」に包摂していることからすれば、「いろは」47文字の、先に出現する仮名に、後に出現する仮名を包摂した、というみかたがひとまずは成り立つであろう（註2）。

つまり、古本節用集の「いろは分類」は発音に基づくものであって、「かつて当該語を仮名でどのように書いていたか」ということとは一義的にはかわりがないことになる（註3）。そして、ここでは第1音節がいわば「焦点」なのであって、語全体をどう書くかということもかわりない、とい



えよう。

さらには、古本節用集の見出しは、漢字列であると思われ、その漢字列に振仮名が施されているとみるのが自然であるとする（註 4）。つまり振仮名の 1 字目で所属部が決められているわけではない。振仮名は漢字列を書いてから施されたものと覚しく、漢字列をとりこんだ時点で想定されていた語形、あるいは「書き方」と異なるかたちの振仮名が施されることはあった。そしてまた、後に述べるように、「(仮名による) これまでの書き方」が持ち込まれることもあった。

そうであっても、「い部」に収めているのだから、振仮名も「イ～」と書くという「判断」はそれはそれで自然なものであるので、「い部」に収められている見出しに施された振仮名が「イ～」で統一されているテキストが多いことは当然といえよう。しかしまた、伊京集の「い部」には「堰埭（右井セキ）」（天地門）「居待月（右井マチノツキ）」（時節門）「夷中人（右井ナカウド）」（人倫門）「藺（右井）」（草木門）「居鷹（右井タカ）」（言語進退門）など、「井～」と書かれた振仮名が散見する。「井」が片仮名の「井」であったとして、これらが「(仮名による) これまでの書き方」が持ち込まれたものであるとすれば、「古本節用集の「いろは分類」は発音に基づくものであつたとしても、それとは異なることがらがいりこむ可能性はあることを示唆している例になる。

いささか図式的かつ粗くなることを承知でごく簡略に次のように整理しておく。

- A 仮名による書き方……………仮名によって語を書いた場合の書き方
- B 仮名の原則に基づく書き方……表音的な書き方
- C 仮名によるこれまでの書き方…かなづかい的な書き方

Aはとにかく仮名によって語全形を書いた場合の謂いで、その中にBとCとがあるとまず考えておくことにする。BとCとは両立しない場合もあるが、それが音韻変化の結果「余った仮名をどう使うか」という狭義の「かなづかい」に関わる場合ということになる。「タニ（谷）」を「たに」と書くということも「仮名によるこれまでの書き方」の踏襲ではあるが、これ

は狭義の「かなづかい」にかかわらない。Cの「干渉」をあまり受けない「仮名による書き方」も当然考えられる。それがBに重なる場合もあるが、それとは異なる場合も考え得る。

### 3 古本節用集の振仮名

古本節用集の振仮名がかかわる言語事象すべてにわたってここで述べることはできないし、事象にかかわる該当例をすべてあげることもちろんできないので、ここでは拗長音音節に施された振仮名がどのように書かれているか、ということに話題を絞ることにする。「拗長音音節がどのように仮名表記されているか」という問題設定それ自体は、「仮名の原則」に基づく設定ということになる。

例えば、黒本本は「し部言語門」に見出し「勝負（右シヨウブ）」を掲げる。その一方で、「せ部言語門」に見出し「勝負（右セウブ）」を掲げる。それぞれの振仮名「シヨウブ」「セウブ」は「ショーブ」を表わしていると思われ、そうであれば、一つの「ショーブ」という発音に「シヨウブ」「セウブ」二つの書き方が対応していることになる。この場合、さらにいえば「ショー」についてのことであり、拗長音音節にどのような振仮名が施されているかということになる。幾つかのテキストを調べ、整理すると次のようになる。「ブ」「フ」は区別しないで整理をする。

シヨウブ…明応本・黒本本

シヤウブ…南葵文庫本

セウブ……黒本本・堺本・饅頭屋本・南葵文庫本・永禄二年本・堯空本

「ショー」という発音に対応する書き方として考えられるのは「シヨウ」「シヤウ」「セウ」「セフ」の4通りであるので、ここではそのうちの3通りがみられることになる。「3通り」は複数の古本節用集テキストにおいて、ということであるが、黒本本、南葵文庫本では、二つの部に同じ語を掲出＝双掲していることがわかる（註5）。漢語「シヨウブ（勝負）」の字音かなづかいは「シヨウブ」と考えられているので、「シヤウブ」という書き方は「開合」に関して問題となる書き方に該当する。

黒本本には見出しの双掲が少なからず看取される。

シヨウジ（勝事）	シヨウジ…………黒本本・伊京集・明応本 セウシ…………黒本本
シヨウデン（昇殿）	シヨウテン…………黒本本・南葵文庫本 セウデン…………黒本本・南葵文庫本・永禄二年本・ 堯空本
ゼウシツ（焼失）	ゼウシツ…………黒本本・饅頭屋本・南葵文庫本・ 永禄二年本 シヨウシツ…………黒本本・明応本
セウソク（消息）	セウソク…………黒本本・伊京集・饅頭屋本・永禄 二年本 シヨウソク…………黒本本・明応本・南葵文庫本
セウナゴン（少納言）	セウナゴン…………黒本本・伊京集・堺本・饅頭屋本・ 南葵文庫本 シヨウナゴン…黒本本・明応本

「字音かなづかい」との兼ね合いでいえば、「字音かなづかい」が「シヨウジ（勝事）」である語を「セウシ」と書くのは「非字音かなづかい」ということになるが、その一方で、「字音かなづかい」が「セウソク（消息）」である語を「シヨウソク」とやはり「非字音かなづかい」で書いている。このことからすると、黒本本が「ショー」という発音を「シヨウ」と書く傾向がある、あるいは「セウ」と書く傾向がある、ということではないと考えざるを得ない。

同一と思われる見出しが双掲されていることは、現象としては「未整理」ということになる。また見出しの出自が異なるということも考えられなくはない。『節用集』が具体的にどのように編まれたか、ということについては案外と話題になってきていないと思われるので、こうしたことについても、幾つかの推測が可能であるが、今はそちらには正面からは踏み込まないことにする（註6）。

古本節用集における見出しの双掲を現象として考えれば、ある語を仮名

で書くかたちが二つ想定でき、かつその1字目が異なる仮名になるために、使い手がどちらの書き方を想定しても求める語にたどりつけるような、辞書編纂上の「工夫」とみることができる。当初からそうした「工夫」をしようとしていたかどうかはむしろ不分明である。当初は所属部と一致しない振仮名を施した「事故」であったかもしれない。しかし、書写が繰り返されていく中で、見出しの所属部が正されたり、そうしたことを契機に双掲されたということも考えられる。

「ショー」と発音する音韻に対応する書き方として「シヨウ」「シヤウ」「セウ」「セフ」があり、どの書き方も「同値」とであるとみなすならば（註7）、音韻と書き方との対応は「1対多」ということになる。これを「語の書き方」という枠組みで説明するならば、「ショーブ（勝負）」と発音する語の書き方が「シヨウブ」「シヤウブ」「セウブ」「セフブ」の4通りがあるが、どの書き方も「同値」とであるとみなすならば、「書き方対語形」が「多対1」ということになる。この「多対1」は屋名池誠が「近世通行仮名表記―「濫れた表記」の冤を雪ぐ（『近世語研究のパスpekティブ』2011年、笠間書院）において、「多表記性表記システム」（167頁）と名付けた表記システムと通う。

古本節用集の振仮名が「かなづかい的な書き方」の干渉をまったく受けていないとはみえないが、原理としては「かなづかい的な書き方」を離れているはずで、そうしたことによって、「かなづかい的な書き方」の軛から解放されにくい文献にはみられない書き方が露出しやすかったのではないか。拗音のように、仮名2字以上をあてる音節の書き方はそうしたことが特に顕著にあらわれた可能性がある。

古本節用集は「いろは」47字を整理し、44部構成にすることによって、「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」における「多対1」をあらかじめ「解消」したといってよい。ここでは話題を拗長音に絞ったが、仮名2字を使う点においては、長音も同様であった。例えば長音「オー」に対応する書き方としては「おう」「あう」「あふ」「わう」「はう」が考えられるが、「はう」は限定的な場合である（註8）ので、ひとまず措く。

例えば「字音かなづかい」が「アウム」である「オーム（鸚鵡）」は次の通り。

アウム……伊京集・明応本・黒本本・永禄二年本

アフム……饅頭屋本・堯空本

ワウム……伊京集・堺本・饅頭屋本・黒本本・南葵文庫本・永禄二年本・堯空本

ヲウム……南葵文庫本「あ部」

「お／を」を区別しないとすれば、右には考えられるすべての書き方が揃っていることになる。「あ」と「わ」とは仮名が異なるので、見出しが双掲されているテキストも少なくない。

## おわりに

古本節用集は「いろは」47文字のうち「ゐ・お・ゑ」を「い・を・え」に合わせることによって、発音が一つで対応しそうな仮名が二つという状況に対しての「手当て」を行なったと覚しい。しかし、仮名2字（以上）を使って書く、「オーム（鸚鵡）」、「ショーブ（勝負）」のように、長音、拗長音を第1音節にもつ語においては、書き方の「揺れ」が所属部にかかわることになり、双掲される見出しをうむことになった。

見出しの双掲は、現象としては複数の書き方に対する対応とみることができる。書き方＝表記と語の対応からすれば、「表記対語形」が「多対1」ということになり、これは屋名池誠の提唱する「多表記性表記システム」と同じシステムであることになる。屋名池誠の「多表記性表記システム」は江戸期の文献に関して主張されているが、本稿の観察からすれば、すでに室町時代中頃には同様のシステムがいわば下準備されていたことになる。

註1 天地の後ろの丸括弧内には「乾坤」とするものもある」とあり、言語の後ろの丸括弧内には「言辞」「言語進退」と称するものもある」とあって、表現が揃っていない。また、数量の後ろの丸括弧内の「病名」には鉤括弧が附されていないが、こうしたことが有意かどうかは読み手には判断しにくい。さらに、「イロハ四四部」と表現する一方で、意義分類を「十二部門」と呼ぶ。このことからすれば、例えば「イ部言語進退部門」と呼

称するということだろうか。通常は意義分類を「門」と称し、「イ部言語進退門」のように呼ぶと思われる。

註2 例えば、黒本本においては、「ゐ部」の位置に「井在前伊」と、「お部」の位置に「越在前遠」、「ゑ部」の位置に「見前恵」と記されている。これらの「前」は単に位置の謂いであるともいえようが、「前」に出現する仮名という意識があった可能性はあろう。12世紀末頃にア行の「イ」とワ行の「ヰ」との区別が失われ、音声としては[i]になり、(音声としては[je]であったと考えられている)ア行の「エ」とワ行の「ヱ」との区別が失われ、音声としては[je]になったことに関してではあるが、「ヰよりもイ[i]の、エよりもエ[je]の発音が多く語において行われていたために、優勢な方に統合されたと考えられる」(沖森卓也『日本語全史』2017年、ちくま新書)という指摘がある。また11世紀中頃からの、語頭におけるア行の「オ」とワ行の「ヲ」との混乱に関して、「ヲはオの二倍ほどの用例数があるので、ヲがオを吸収して、音声としては[wo]一つになったと見られている」(木田章義編『国語史を学ぶ人のために』2013年、世界思想社、117頁)という指摘もある。

註3 今西浩子「易林本節用集の仮名遣」(『国語文字史の研究3』1996年、和泉書院)は易林本の振仮名の「かなづかい」を話題とし、併せて「易林本節用集以外の節用集」(141頁)の振仮名の「かなづかい」も話題としている。

註4 玉里文庫本は「見」部の末尾三行から最後の「須」部までの漢字列のほとんどすべてに振仮名が施されていない。これは玉里文庫本(の少なくとも当該箇所)が漢字列を書いてから振仮名を施した、という書写の「手順」を窺わせる。書写の「手順」ということがらに限定すれば、そうしたことにとどまるが、やはり『節用集』タイプの辞書体資料の見出しの「中核」は漢字列であるということを示唆する例とみることができると考える。伊京集の「い部」には「堰埭(右井セキ)」「天地門」「居待月(右井マチノツキ)」「時節門」「夷中人(右井ナカウド)」「人倫門」「蘭(右井)」「草木門」「居鷹(右井タカ)」「言語進退門」など、「井～」と書かれた振仮名が散見する。「井」が片仮名の「ヰ」であったとして、これらが「仮名による書き方」が持ち込まれたものであるとすれば、「古本節用集の「いろは分類」

は発音に基づくものであつたとしても、それとは「異なることがら」がはいりこむ可能性はあることを示唆している例になる。亀井孝は「かなの原則」と「語をどう書くか」はそもそもかわりがないと述べたが、原理的にはそうであっても、現象として、相互が干渉することはある、とみておく必要があるのではないか。

註5 古本節用集タイプの辞書体資料において、同一と思われる語が双つの部に掲出されていることを「双掲」と呼ぶことにする。

註6 例えば、大谷大学本においては、「ち部言語進退門」に見出し「朝恩（右テウヨン）」が置かれている。漢字列「朝恩」に「チャウヨン」と振仮名を施して「ち部」に置くテキストとして正宗文庫本があり、「チョウヨン」と振仮名を施して「ち部」に置くテキストとして穂久邇文庫本・明応本・増刊節用集・龍門文庫（天文十九年）・横本・堺本・和漢通集・天正十七年本がある。その一方で、「テウヨン」と振仮名を施して「て部」に置くテキストとして伊京集・早稲田大学本・阿波国文庫本・黒本本・前田本・佐々木本・経亮本・枳園本がある。玉里文庫本は大谷大学本同様、「テウヨン」という振仮名を施して「ち部」に見出しを置く。堺本・小汀本・徳遊寺本・南葵文庫本・草間直方本・寛永19年本・義知本は見出しを「ち部」「て部」に双掲する。「朝（チョウ）」の「字音かなづかい」が「テウ」であることを起点として説明するならば、大谷大学本においては、いったんは「チャウヨン」または「チョウヨン」という書き方を想定し、あるいは書き方までは想定せずに、「チャーオン」と発音する語であることを認識し、「ち部」に漢字列を見出しとして配置した。その後に振仮名を施すにあたって、「テウヨン」という振仮名を書いた、という「順番」などがまずは考えられる。しかし「チャーオン」という発音が起点であるならば、配置される部は「ち部」であることが自然であることになるが、諸本をみわたすと、先に列挙したように、「テウヨン」という振仮名を施して「て部」に見出しを置くテキストも少なくない。このことからすると、古本節用集が「語の第一音節によって」ということについても、より慎重に考えておく必要がある。つまり、「語の第一音節によって」は見出しとしている「語の第1音節の当該時期の発音によって」ではない場合もあることになる。第1番目の振仮名によって見出しの所属部が決まっているという説明はできなくはないが、

そうすると古本節用集を使う場合に、自身の発音によっては検索ができないことになる。本稿では、拗長音を例として採りあげているが、拗長音を仮名でどのように書くかということをめぐって、「仮名の原則に基づく表音的な書き方」と「仮名によるこれまでの書き方を顧慮したかなづかい的な書き方」とが「相克」し、それが古本節用集という「場」に「見出しの双掲」というかたちを採って現れた、とみることができるのではないだろうか。

註7 「どの書き方も「同値」であるとみなすならば」と述べたが、「字音かなづかい」が「シヨウブ」である語はその発音がオ段合拗音であり、その発音がオ段開拗音である「シヤウブ」と書く語とは「同値」ではないというのがこれまでのみかたであった。そして「字音かなづかい」が「シヨウブ」である語を「シヤウブ」と書くことをもって、「開合の違例」とみなしてきた。オ段長音における「開音」「合音」をどのようにとらえるかということについても議論があるが、(そもそも両者が音韻的な差ではないとすれば、そもそも、ということになるが、音韻的な差であった場合であれば)両者が「差」を失った時期においては、「シヨウブ」も「シヤウブ」も「同値」ということになる。古本節用集の振仮名が案外と、所謂「開合の違例」を見せないのは、「かなづかい的な書き方」の干渉があるためではないか。

註8 「カハウ(買)」「マハウ(舞)」はそれぞれ「カオー」「マオー」という発音になったと思われ、その時には「はう」が長音「オー」に対応していることになる。字音語には該当例はないので、そうした意味合いにおいてはいささか特殊な例といえよう。